

錢形平次捕物控

鐘五郎の死

野村胡堂

青空文庫

一

三河町一丁目の大元締^{おほとしめ}、溝口屋鐘五郎の家は、その晩割れ返るやうな賑ひでした。親分の鐘五郎は四十三歳、後^{あと}厄^{やく}の大事な誕生日を迎へた上、新に大々名二軒の出入りを許されて、押しも押されもせぬ、江戸一番の人入稼業になつた心祝ひの酒盛だつたのです。

集つた子分は三十八人、店から奥へ三間ほど打つこ抜いて、底の抜けるやうな騒ぎ。——十六基の燭臺、二十幾つの提灯に照された酒池肉林は、歡樂極^{きは}まつて淺ましい限りでした。

親分の鐘五郎は、暫くこの有様を眺めてをりましたが、あまり強くない酒を過したのと、この上頑張つてゐると、子分共の感興を妨さまたげることゝ氣が附いて、上座の子分二三人に目顔で合圖をしてそつと起ち上がりました。こゝから廊下續きの自分の部屋に歸つて、靜かに休むつもりだつたのでせう。

子分の勘次と六助は、早くも氣が附いて、親分の後に従したがひました。

「いゝよ、休むのは獨りの方が氣樂だ。——お前達の姿が見えなくなつたら、後が淋しからう。歸つてゆつくり飲み直すがいゝ」薄暗い廊下の端つこ——自分の部屋の入口に立つて、鐘五郎は手を振りました。鬼の鐘五郎と言はれた酷こくはく薄無殘な男ですが、

満ち足りた今宵ばかりは、さすがに鷹揚な心持になるのでせう。

「それぢやあんまり」

「いゝつてことよ、みんなの氣の付かないうちに歸つてくれ」

「それぢや、親分」

「あとを頼むよ」

「お休みなさいまし」

勘次と六助は、親分の鐘五郎が唐紙を開けて自分の部屋に入るのを見定めて、もとの酒宴の席に歸つたのです。それが丁度亥刻よつ（十時）——上野の鐘が騒ぎの中を縫つて、響いてゐるのに氣が附きました。

「忌々いまくしいぢやないか。——裏の臆おくびやう病馬吉奴、まだ尺八を

吹いてやがる」

勘次は大きく舌打をしました。もとは飯田町の伏見屋傳七の身内で、勘次や六助と同じ釜の飯を食った臆病馬吉といふ男が、伏見屋が没落した後、勘次や六助が溝口屋の身内になつて、相變らず威勢の良い暮しをしてゐるのに、甲斐性がないばかりに日傭取ひようにまで身を落し、好きな尺八一管を友に、溝口屋の裏に住んで見る影もなく生きてゐる馬吉だつたのです。

「宵から息もつかずに吹いてゐるよ。どうせ臆病馬吉の藝當だから、糸に乗るやうな代物しろものぢやねえが、こちとらの酒までまづくさせるのは業腹だね」

「——おや、今晚はいつもよりうめえやうだが——」

「うまくたつて、女を口説く足しにはならねえよ」

「違えねえ」

「ハツハツハツ」

二人は顔見合せて笑ひながら、もとの亂酒の席に還かへりました。
ドツ、ドツと波打つ馬鹿騒ぎの間を經つて、ひよぐるやうな尺八の調べが、狭い庭を隔へだてた隣の長屋から、小止みもなく響いて來るのです。

それから四半刻（三十分）と經たぬうちに、事件は思はぬ大發展をしました。酒席の手のすいた時、下女のお元は親分の床がまだ敷いてなかつたことに氣が付き、あたふたと廊下傳ひに駈けて行きましたが、唐紙に手を掛けて、

「親分、お床を敷きませう」

ひよいと覗くと仰天しました。

「あツ、た、大變ツ。誰かツ、誰か來て下さいツ」

ヘタヘタと敷居際に腰を抜かしたのも無理はありません。親分の溝口屋鐘五郎は、八疊の部屋一パイに浸す血潮の中に虚空こくうを掴んで死んでゐたのです。

二

騒ぎは一瞬にして宴樂の席に水をブツ掛けました。

「何んだく」

「何を騒ぐんだ」

ドカドカ雪崩なだれ込んだ子分達、親分溝口屋鐘五郎が、紅に染んでことき緯切れた姿を見ると、さすがに亂酔の酒もさめてしまひます。

その間に頭立つた子分は、血潮の中の鐘五郎を抱き起しました。傷はたつた一箇所、後ろから左肩ひだりかひがら胛骨の下、心臓の眞つ唯中つらぬを貫いて、曲者の卑怯さは見る者を齒嚙みさせますが、その代り聲も立てずに死んだことでせう。

心きいた者は、町内の外科と、土地の御用聞——三河町の佐吉と、町役人に急を知らせました。が、時を移さず飛んで來た醫者も御用聞も、手の下しやうはありません。鐘五郎は間違ひもなく人手に掛つて相果てたのですが、見渡したところ、窓も雨戸も、

稼業柄らしく恐ろしく嚴重に締めきられ、入口はたつた一つ、酔つたとは言つても、三十八人の子分共が、七十六の眼で見張つてゐる酒席の後ろの廊下——明けつ放しの三尺の板敷を通る外に、こゝへの通路はなかつたのです。

稼業柄らしく——といふ言葉は、溝口屋鐘五郎の生活を形容するためには、極めて重要な意義を持つものでした。江戸で一番と言はれた人入稼業の溝口屋が、こゝまで申しあげるためには、どれだけ多勢の人を泣かせて來たかわからず、従つてどこに命を狙ふ敵があるのか、鐘五郎自身にも見當が附かぬ有様で、出入りには三人五人の子分をつれ、入つては二重三重の締りの中に籠つて、不慮の襲撃に備へるそなるのが、鐘五郎日頃のたしなみになつてゐるの

でした。

「親分がこゝへ入つてから、誰も來たものはないか」

中年者の、ことに馴れた佐吉は、くり返しくり返し訊きました
が、亂酒狂態の中にも、お互が見張つた形になつてゐるので、おびたゞ夥
しい燭臺と提灯の明りに照らされながら、廊下をこゝまで忍べる
道理はありません。

「お元の外には誰も親分の部屋へ入つた者はありませんよ」

廊下の側に陣取つて、あまり酒を飲まなかつたらしい子分の喜
太郎は言ふのです。

「その私が、親分が殺されてゐるのを見附けたぢやありませんか」
したゝ強か者らしい感じのする下女のお元は、敢然として抗議しまし

た。

「お元がこゝへ入るのを見てゐたのは誰だ」

佐吉は四方^{あたり}を睨め廻します。

「あつしで」

喜太郎は顔をあげました。

「お元が親分の部屋へ入つてから、悲鳴をあげるまでに、少しは間があつたのか」

「いえ、唐紙をあけると直ぐ張りあげたやうですよ」

「それぢや親分を殺す隙はなかつた筈だ——」

「まアそんなことで」

これでは仕様がありません。

尤も溝口屋三十八人の子分には、いろ／＼の分子が交つてをりました。その中には、日頃親分の酷薄な態度を怨んでゐる者もあり、中には曾て親分鐘五郎の敵方だつた者の子分で、途中から轉げ込んで來た者もないではありません。現に顔の良い六助や勘次も、もとを洗へば飯田町の伏見屋の子分で、溝口屋に盾を突いた仲間ですが、今では鐘五郎の傘下に馳せ加はり、忠勤を勵む外には、何んの餘念もないことは、溝口屋一家の者は言はずもあれ、大きく言へば江戸中で知らない者もなかつたのです。

よしや子分の中に、異心を抱く者があつたとしても、七十六の眼玉の光る中、明りの洪水こゝろずゐを浴びた廊下を、どう工夫をして鐘五郎の部屋に近づくでせう。

三

「錢形の兄哥、——かういふ始末だ。溝口屋は確かに人手に掛つて殺されたに違げえねえが、締めきつた奥の部屋へ、鼠一匹入つた様子はないのだ。今更鎌^{かま}たちでも濟されず、俺も今度といふ今度は兜^{かぶと}を脱いだよ。日頃の誼^{よし}み、何とか智恵を貸してはくれまいか」

三河町の佐吉が、すっかり角を折つて、そつと錢形の平次のところへ相談に來たのは、それから三日も経つてからのことでした。「俺が行つたところで、大した役にも立つまいが、兄哥の氣が濟

むなら——」

平次は思ひの外氣輕に御輿をあげました。

「そいつは有難てえ」

いそくと後を追ふガラツ八の八五郎。

「お前が出る幕ぢやないよ、おとなしく留守をするがいゝ」

平次は佐吉の氣を兼ねて、一應は止めました。

「へエ——」

「不足らしい顔をするぢやないか。それぢや外から溝口屋の評判を訊くがいゝ。溝口屋の評判はよくないやうだから、うんと怨んでる者が一人や二人はあるだらう」

「へエ——」

ガラツ八の八五郎は平次の申附けに反き兼ねた様子で、途中からどこともなく逸^それてしまひました。

兎も角も溝口屋へ行つた平次は、三河町の佐吉の轍^{てつ}をふまないやうに、外廻りから探索の手をつけました。表通りは六間間口の磨き抜いた格子。——そこは宵から締めてゐた筈で、鐘五郎の命を狙ふ者などの忍び込んだ筈はなく、裏へ廻ると、狭い庭を距^{へだ}てて長屋が五六軒。按摩^{あんま}と、屑屋と、人足と、占者と、地紙賣とが住んで、仕舞ひ忘れた洗濯物くらゐは狙ふかも知れませんが、人の命などを狙ひさうなのは一人もおりません。

その中で一番筋の立つたのは、もと飯田町の人入稼業で、伏見^{ふしみ}屋傳七の子分——と言つても、庭掃^{にわは}きや飯炊^{いひ}きをしてゐた馬吉と

いふ男だけ。伏見屋が没落してからは、人足にまで身を落しましたが、臆病馬吉といふ^{あだな}綽名で呼ばれて、本人も大して極りも悪がらずに返事をする呑氣者。尺八を吹くのと、上手に飯を炊く外には、何んの取柄もない男です。

「あの晩、何にか氣の附いたことはないのか」

平次の問ひに對して、馬吉は蟲喰ひ月^{さかやき}代を撫でながら應へる

のでした。まだ三十そこく、若くも威勢よくもあるのですが、何んの^{いんぐわ}因果か生得恐ろしい臆病者で、かう平次に訊かれてさへ、もうガタガタ五體が顫^{ふる}へ出して、言ふこともしどろもどろと言つた心細さです。

「溝口屋の親分の心祝だつたさうで、宵から大變な騒ぎでしたよ。

——尤もこちとらには、何んの關係のあることぢや御座いません。あつしは一と晩尺八ばかり吹いてゐました」

ガラツ八に似た馬面を振り仰いで、馬吉は淋しく笑ふのでした。あれ程の祝事にも、近所には何んの挨拶もなかつたのでせう。

「溝口屋はそんなに近所で評判が悪かつたのか」

「へエ——。こちとらのひがみかも知れませんが、あつしのもと
の親分の、飯田町の伏見屋のやうなわけには参りませんよ。伏見
屋ぢやあんな騒ぎのある時は、近所へ一人前づつでも膳部を配つ
て、おやかましう御座いますと、丁寧に挨拶したのですが、へ
エ」

馬吉の不平は、さう言つたひがみに過ぎません。

平次はなほも近所の噂をあさりましたが、馬吉と大同小異で、溝口屋を憎む心には、何にか一貫したものがあつた様です。

中に入つて調べると、溝口屋の間取りは、佐吉から聞いた通りで、三十八人の眼を免れて、鐘五郎の部屋に入る方法のないことは、あまりにも明かでした。鐘五郎の部屋といふのは一番奥の八畳で、九月の聲を聴くと、夕方から締めきり、寝る時は鐘五郎自身、もう一度戸締りを見直すといふ嚴重さで、庭から忍び込む方法のないことも佐吉の言つた通りです。

尤も外から聲を掛けて、鐘五郎自身に開けさせて入るといふ術^てはありませんが、その假説は鐘五郎の性格を知らない人の言ふことで、あまりにも前半生に罪を作つてゐるので極端に警戒性の發達

した鐘五郎は、店先から入つて子分共の關所を通つた客でなければ會ふ筈もなく、どんな親しい人みきはと見極めが付いても、嚴重な雨戸の締りを外して、庭から寢室へ直接客を通すなどといふことは、全く想像もできないことだつたのです。

よしんば又、雨戸を鐘五郎に開けさせて庭から直接入つたとして、くせもの曲者は鐘五郎を刺した後で、どうしてこゝを抜け出したこととでせう。窓も雨戸も、嚴重に締つてゐたことは、子分達全部が證言することで、その間に疑ひを挟むべくもありません。

「これぢや手が付けられない、兄哥が持て餘したのも無理はないよ」

平次もつく／＼さう言ふ外はなかつたのです。

「ね、錢形の、この通りだ」

三河町の佐吉も平次の困惑するのを見て、ホツとした様子でした。

「だが、曲者が入つて、溝口屋を刺したことだけは確かだ。念のため子分の重立つた者に、一人一人會つて見ようぢやないか」

平次は諦めませんでした。この上は三十八人の子分の顔から、曲者の匂ひを嗅ぎ出す一手です。

四

「親分、御苦勞様で」

一の子分の喜太郎は、少し光澤つやのよくなつた顔を撫でながら、
強したゝかな微笑を浮べました。

「親分の死骸を見附けた時のことを詳しくくは聴きたいが——」
平次は靜かに問ひ進みます。

「へエ——。何遍もくり返して、諳そらで覚えてしまひましたが、——
あの晩、騒ぎの眞つ最中にお元の聲を聞き付けて、六助と勘次
とあつしが駆け付けました。親分は部屋の眞ん中——丁度衝ついたて立
の前のところに引つくり返つてもう蟲の息もありません。こいつ
は大變と思つたから廊下の入口を六助に見張らせ、勘次に言ひ付
けて、外科と三河町の親分さんと、町役人のところへ人を駈けさ
せました」

「雨戸は開けなかつたのか」

「勘次が開けようとするのを、あつしが止めました。そいつは後で證據になりさうだと思つたからで」

喜太郎はさすがに行き届きます。

「曲者は宵のうちから入つて、騒ぎの後までこの部屋に隠れてゐたかも知れない。――捜して見なかつたのか」

「捜しましたよ。おほさうち大掃除ほどの騒ぎをしましたが、床下にも、

天井裏にも、押入にも疊の目にも、のみ蚤一匹隠れてゐるこつちやございませぬ。この通り、親分はかんしやう疳性で、掛物も置物もない部屋です」

喜太郎は四方を見廻してペアと手を擴げました。衝立一つ、煙

草盆一つ、行燈あんどんが一つ、他には、何んの興味も裝飾もない、鐘五郎の無趣味な生活が、よく現れてゐる部屋でした。

「雨戸を開けたのは？」

「三河町の親分がお出でになつてからでした」

「その時廊下を通つた人はないのだな」

「廊下には三十何人の子分が、目白押しになつてゐましたよ。頭の上でも渡らなきや通れるわけはありません」

喜太郎は平次のくどいのを馬鹿にしたやうにひよいと廊下の方へ頤あごをしやくるのですた。

「親分の評判はどうだつた。——親分を怨んでる者はないのか」
「そいつはどうも、ヘツ」

喜太郎はさすがに答へ兼ねました。^{いきおひ}勢と力に附いてゐる喜太郎

にしては、親分の評判などは、どうでもいい、問題だつたにしても、改めてかう訊かれると、さすがにツケツケしたことも言へません。續いて六助に會つて見ました。これはまだ三十そこゝの分別者らしい男ですが、もとは溝口屋と張り合つて没落した飯田町の伏見屋の身内だつたことは、平次もよく知つてをります。

「何時からこゝへ來てゐるんだ」

平次の問ひは豫想外でした。

「もう四年になります」

「早いもんだなア、伏見屋が死んでもう四年になるのか」

「いえ、伏見屋の大親分が亡くなつたのは三年前で」

「さうか、——この家の居心地はどうだい」

「——」

「あの晩はどうしてゐたんだ」

「勘次と狐きつね拳で飲んでゐましたよ」

「酒はどつちが強いんだ」

「まア似たやうなもので」

これ以上は何んの手掛りもありません。

勘次は三五六の精悍せいかんな感じのする男ですが、六助と二人、

みんなの見てゐる前で、狐拳をしながら飲んでゐたに相違なく、
少しの疑ふ餘地もなかつたのです。

三河町の溝口屋と飯田町の伏見屋は、同じ人入稼業の競争相手

でしたが、伏見屋傳七が年寄の上に病身だつたので、若くて惡^{あく}辣^わな溝口屋のために次第に出入りの大名屋敷を奪はれ、三年前伏見屋傳七が死んだ後は、伴の傳之助は店を疊^{ゆくへ}んで行方知れずになつてしまひました。伏見屋の多勢の子分達が散り／＼バラバラになつた中に、馬吉のやうに日傭^{ひよう}取になつたのもあり、六助や勘次のやうに、巧^{たく}みに溝口屋に取入つて、三年経たないうちに良い顔になつてゐるのもあつたわけです。

若し溝口屋三十八人の子分の中に、親分の鐘五郎を殺す者があつたとしたならば、それは伏見屋の怨^{うらみ}を承け繼ぐ、六助と勘次のうちでなければなりません。こんな話をする、

「錢形の、——そいつは一應尤もだが、二人共溝口屋の子分にな

りきつてゐるぜ。それにあの晩六助と勘次は、親分の鐘五郎を送つて部屋の入口まで來たことは確かだが、そこで親分と別れてもとの席へ歸つたのは、喜太郎も見てゐる——それから狐きつねけん拳の曲飲みだ」

「フーム」

さう言はれると、六助と勘次も、鐘五郎を刺す隙ひまがなくなります。

「喜太郎はその間に立たなかつたのかな？」

「その間といふと」

平次の不審を、佐吉は訊き返しました。

「鐘五郎が自分の部屋へ引込んでから、お元が死骸を見掛けるま

で四半刻（三十分）ほどの間だ」

「一度手洗に立つたが、それは、ほんの一寸だ」と佐吉。

「そのほんの一寸が恐ろしい」

「喜太郎が立つと、廊下の側にある人間はなくなるが、廊下に向いた障子はあちこち開けてあるし、部屋中には燭臺が十六、百目ちふそく蠟燭を惜し氣もなく點けてゐる上に、軒には提灯が二十幾つづラ下がつてゐたんだぜ。まるで晝だ、人間がそつと通れるわけはない」

佐吉の調べも思ひの外よく届いてをります。

五

その晩八五郎は、萎^{しを}れ返つて引揚げて來ました。

「どうした八、目星は付いたか」

「あれから丸半日、足を搥^{すりこぎ}粉木に飛び廻りましたよ。三河町が變な顔をするから、あつしはあつしで、外から犯^{ほし}人を擧げるつもりだつたんで」

八五郎は邪魔物扱ひにされた腹癒せに、一世一代の働きをしてアツと言はせるつもりだつたのでせう。

「それがどうした」

「親分の前だが、大外れ、まるで見當も付きませんよ」

八五郎は額を叩くのです。

「内から搜^{さぐ}つて判らないくらゐだもの、外から判るわけはないよ」

「でも、鐘五郎の身の廻りの世話をしてゐるお元といふ女が、内々鐘五郎を怨んでゐることは突き留めましたよ」

「そんなこともあるだらうが、——あれは女の手際ぢやないよ。

たつた一と突で、聲も立てずに死んでゐるんだ。それに、お元がやるなら何もあんな晩に限つたことぢやあるまい。何時、どこでもできることぢやないか。そつと首を搔いて、雨戸を開けて置いて、判らないことは同じだ」

「成程ね。——あつしはお元ばかり狙つたんだが」

「それつきりか」

「まだありますよ。あの晩は、飯田町の伏見屋の三回忌だつたさうですね」

「何？」

「伏見屋傳七は病死といふことになつてゐるが、本當のところは、首を縊くつて死んだといふ噂ですから、怨みを繼いだ子分か身内がないとは限りません」

ガラツ八の八五郎。——錢形平次の爲には、順風耳の役目を勤めるこの男は、今度もまた大變なことを聴き出して來たのです。尤もその材料を分類整理して、素晴らしい結論に到達することは、平次に任せなければなりません。

「そいつは耳寄りだ。伏見屋の身内で、あの晩變な素振りした者

でもあるのか」

「六助と勘次——あの二人の裏切り野郎は、
狐きつね拳けんで飲んでゐ
ましたよ」

「そいつは聞いた」

「伏見屋の倅の傳之助は、駒込の親類に引取られて、枕まくらもあがら
ぬ大病だ」

「フーム」

「臆おくびやう病 馬吉は尺八ばかり吹いてやがる。尤も隣の騒しやくぎが癩しかに

さはつて、黙つて寝ちやゐられなかつたかも知れない」

「馬吉は死んだ親分——伏見屋傳七の三回忌と知つて尺八を吹い
てゐたのか。それとも忘れてゐたのか」

「佛壇の前に饅頭^{まんぢゅう}だの眞桑瓜^{まくはうり}だの、やたらに積んで、線香の燃えさしがザクザクあつたところを見ると、まんざら忘れたわけぢやないでせう」

「フーム」

「あの下手な尺八が弔^{とむら}ひの足しになると思つてゐるところが臆病馬吉ぢやありませんか」

「それから」

「馬吉の尺八友達で、足の悪い春松といふ男は、宵^{よひ}から留守だつたさうですよ」

「そいつは何んだ」

「伏見屋の帳面をつけてゐた男で、三河町の三丁目に住んでゐま

すよ。尺八は馬吉の先生で、不景氣な野郎だが、字が滅法うまい」

「足はひどく悪いのか」

「一人で歩けないこともありませんが——」

「その春松の様子を捜^{さぐ}つて來てくれ、あの晩どこへ行つたか。——
——そいつは大事なことだよ」

「へエ——」

ガラツ八は弾みが付いたやうに飛び出しました。いよく事件の山が見えたやうな氣がしたのです。

六

ガラツ八の八五郎が三河町へ飛んで行つた後、事件の重大な發展に氣の附いた平次は、自分もその後を追ひました。

三河町三丁目で、足の悪い春松と訊くとすぐわかります。いゝや近所で訊くまでもなく、とある路地の奥から響き渡る八五郎の張り上げた聲は、平次には何よりの^{しをり}葉になつたのでした。

「やいゝ、知らぬ存ぜぬで通ると思ふか。あの晩お前が宵から消えて、夜中に歸つて來たことは、長屋の衆が皆んな承知だぜ。どこへ行つて來たんだ、眞つ直ぐに白状しねエ」

「どこへも行きやしません。——この足ですよ、親分」

ガラツ八の噛みつくやうな聲と、春松の^{つぶや}呟くやうな聲が、惱ましい對照で、同じことを際限もなく繰り返してをります。

「八、どうした」

「親分、この通りだ。しよつ引いて行つて、二三百引つ叩きませうか」

平次の姿を見ると、ガラツハは懷中の捕縄などをまさぐるのです。

「ウム、口を開かなきや仕方があるまい。可哀想だが引立てて來てくれ。縄には及ぶまいよ、どうせ逃げ出す相手ぢやない。——その代りお前の背中を貸してくれ」

「ヘエ——」

「その男を背負つて行くんだ。ツイ、そこまでだよ。——遠慮をするな」

「へエ——」

八五郎は否^{いな}みやうもなく、足の悪い春松を引つ擔ぐやうに、平次の後に従ひました。

そこから一丁目まで、溝口屋の裏へ廻ると、臆病馬吉の長屋の格子をガラリと開けたのです。

「又來たよ」

「あ、錢形の親分」

馬吉はもう、サツと顔色を變へて、ガタガタ顫へ出しました。

「馬吉、あの晩のことをもう一度繰り返してくれ」

「へエ——」

「溝口屋が殺された晩、^{よつ}亥刻（十時）から亥刻半（十一時）まで、

お前は何をしてゐたんだ」

平次は假借のない顔です。

「尺八を吹いてゐましたよ、親分」

「それつきりか」

「へエ——」

「伏見屋の三年忌だつたさうぢやないか」

「へエ——」

「お前の尺八は供養くやうになるのか。——尤もあの晩は大層うまかつたといふが」

「——」

「見ろ、春松は縛られてゐるんだぜ。あの晩こゝへ來て、二人で

何をやつたんだ」

平次は後に従ふガラツ八と、その背中にゐる春松を指さしました。

「尺八を吹いてゐましたよ、親分」

「二人でか」

「へエ——」

「一人は抜け出して、溝口屋へ忍び込んだ筈だ」
平次の論告は峻烈です。

「飛んでもない、親分」

「お前が春松をつれて來たのを、誰知るまいと思ふだらうが、大の男が大の男をおんぶして歩くのを、月がなくなつて、江戸中の

人が知らずにゐると思ふか」

「春松に尺八を吹かせて、お前が脱けだしたに違ひあるまい。――溝口屋の裏から忍び込んで、宵の内に奥に潜り、鐘五郎が部屋へ入つて來ると、衝立ついたての後ろから飛び出して、背中を一と刺しやつた筈だ」

「親分、違ひます。違ひますよ」

「いや違はない、お前の外に鐘五郎を殺した者はない」

「あの明るい廊下を、三十何人の子分の眼をかすめて、逃げ出す工夫はありません」

「それ見ろ、廊下の明るいことも、子分が三十何人で飲んでゐたことも、お前はみんな知つてゐる」

「――」

「その廊下を通る工夫はあつた筈だ。――喜太郎が小用に立つた時かな。――」

「さうだ。――部屋が暗いと外が明るい。――部屋をうんと明るくすれば、廊下は反^{かへ}つて暗い筈だ。何んだつて俺はこんなことが判らなかつたんだ。――お元は年増でも女だ。身^み扮^{なり}も色つばいし赤いものも着けてゐる。薄暗い廊下を通つてもすぐ判るが、あの壁の色と同じ茶色の着物でも着た人間が通つたら、部屋の中で飲んで騒いでゐる人間には判らなかつた筈だ。――八、この野郎を押へてゐろ」

「へエツ」

春松を放り出したがラツ八は、矢庭に馬吉に組付くと、その胸倉を取つてねぢ倒しました。

平次は四方を見廻あたりしました。何んにもありません。恐ろしく念入りな貧乏暮し、土瓶どびん一つ、鉢巻をした火鉢が一つの浅ましい世帯で、溝口屋の砂壁と同じ色の着物——それは御隠居の着る十徳か何かであるべき筈のもの、こゝにある道理はなかつたのです。

三尺の押入を開けると、煎餅蒲團せんべいぶとんが二枚、その下敷になつてゐるのが、柿色かきいろの大風呂敷ではありませんか。

「これだ」

ズルズルと引き抜いて、パツと擴げると、隅つこの方にほんの僅かばかりですが、飛沫ひぶいた血汐の跡。

「馬吉、これでもまだ強情を張るか」

「ヘツ——」

ガラツハの逞^{たくま}しい腕の中に、臆病馬吉はヘタヘタと崩折れると、女の子のやうに、シクシクとせぐりあげるのです。

七

「聽いて下さい。錢形の親分さん」

馬吉は涙の中から言ふのです。

飯田町の伏見屋傳七が死んだのは、噂の通り縊^い死。溝口屋鐘五郎の惡^{あく}辣^{らつ}な奸策に乗ぜられて、一つく出入大名の屋敷を縮^{しくじ}尻

り、最後にのつ引ならぬ窮境に追ひ込まれて、自分の命を縮めたのでした。

子分達はチリチリバラバラ、中には敵の溝口屋に入つてヌケヌケと押し歩く六助、勘次のやうなものもあります。伏見屋の倅傳之助が、駒込の知邊に患^{わづ}らつてゐるのに、近頃は誰も見舞つてやる者さへなく、その中で足の悪い春松と臆病者の馬吉だけは、感心に昔の恩を忘れず溝口屋の榮えを齒噛みをして口惜しがつてゐたのでした。

が、不具者と臆病者の悲しさ、二人の力では、出入りの嚴重な溝口屋に、一と太刀恨むすべもなく、馬吉は溝口屋の裏に住んで、敵の様子を狙ひながら、足掛三年の長い月日を、仕返し工夫と、

その時節到來を待つて、空^{むな}しい憤怒の日を送つてゐたのです。

鐘五郎が誕生日を祝つた日、それは丁度伏見屋傳七の三回忌で、是が非でも思ひ立たなければならなかつたのでした。春松をつれて來て一と晩自分の代りに尺八を吹かせ、それを現場^ア不在^リ證明^イに、宵から、溝口屋の奥に潜んだ馬吉は、臆病者の一生懸命さで、どうやら斯^かうやら目的を遂げました。

そこを逃げ出すのは容易ならぬ仕事でしたが、幸ひ用意した柿色の風呂敷が役に立つて、喜太郎が小用に立つた間に廊下を抜け、自分の長屋に逃げ歸つて、春松を送り返した手順は、平次が想像したものと同分の違ひありません。

「かうなれば、逃げも隠れもしません。溝口屋殺しはあつし一人

の罪、春松だけは許してやつて下さい。お願いで御座います。親分」

馬吉は後ろに手を廻して、觀念の眼をつぶります。

「飛んでもない、馬吉一人の罪ぢやありませんよ。——あつしも相談に乗つたんだから、一緒に縛つて下さい。——仲よくお處^{しおき}刑臺に並ばうぢやないか、なア、馬吉」

春松は膝と手で這ふやうに、平次と馬吉の間に割つて入りました。

「何を言ふんだ。足の不自由なお前に、こんな大それたことができるものか」

「足が不自由だつて、俺は臆病ぢやねえ」

「何をツ」

二人の争ふのを、

「まア、いゝ。春松も追つてお調べがあるかも知れないが、お上の御沙汰を待つがいゝ」

平次は宥^{なだ}めて馬吉を引立てました。

「親分、願ひがあるんだが——」

「何んだ、未練がましいことを言ふなよ」

「そんなことぢやありません。縄付のまゝ、溝口屋の庭を通つて行つて下さい」

馬吉は妙なことを言ふのです。

「何をするんだ」

「つまらないことなんです、平常あつしの臆病を笑つてゐる六助と勘次の面が見てやりたいと思ひます」

「よし／＼」

「親分、縛つて下さい。縄付でないと睨みがき／＼ません」

「成程、そんなこともあるだらうな」

形ばかりの縄を掛けた馬吉を引立てて、平次は溝口屋の庭へ入つて行きました。

多勢の子分達に交つて、六助、勘次が、それを見送つてゐることとは言ふまでもありません。

「親分、ちよいと待つて下さい」

「何んだ」

縄付の馬吉は立ち止りました。

「やい、六助、勘次。——伏見屋の親分の敵は、この俺が——臆病馬吉が討つたよ」

「——」

「大きな面アしやがつて何んでエ。畜生ツ、恩知らず。馬鹿野郎ツ」

「——」

言ふだけのことを言ふと、馬吉は絶句して、縛られたまゝ、ロボロと涙を流すのです。

溝口屋の子分は色めき立ちましたが、平次と八五郎がついてゐるので、今更手出しもならず、六助と勘次は、こそくと人の後

ろに隠れてしまひました。

×

×

×

臆病の馬吉は、打首にもなる可きでしたが、溝口屋鐘五郎の悪事が平次と八五郎の骨折で段々明るみへ出たのと、伏見屋の怨みを酬^{むく}いたといふ筋が立つて、三宅島へ遠島になり、二年の後には赦されて江戸に歸りました。

臆病馬吉の俠^{けふめい}名が、江戸中に響いたのはその後のことです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十五卷 火の呪ひ」同光社

1954（昭和29）年5月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1942（昭和17）年8月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2016年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

鐘五郎の死

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>